※注意　各ページの全ての問題について、解答する際に字数制限がある場合には、句読点や「　」などの符号も字数に数えること。

一　森川中学校では総合的な学習の時間に、地域について学習しています。河合さん、山田さん、里中さんの三人は、森川町の特産野菜である小松菜の魅力を調べるため、取材に出かけました。これから、それぞれの「取材メモ」をもとに、「森川町の小松菜ならではの魅力は何か」について話し合っている場面と、それに関連した問いを四問放送します。1ページの「取材メモ」を見ながら放送を聞き、それぞれの問いに答えなさい。

（放送が流れます。）

「取材メモ」

【河合】　取材先…給食室の栄養士さん
・小松菜はカルシウムが豊富
・一年を通して手に入りやすい
・献立に多く登場
・栄養士さんの考え

【山田】　取材先…地元の商店街のかた
・小松菜を使った商品
・味のよさ
・新鮮さを保つための保存方法
・商店街のかたの思い

【里中】　取材先…地元の小松菜農家のかた
・小松菜を使った料理
・柔らかくあくが少ない
・無農薬なので手間がかかる

(1) （問いを放送します。）

［選択肢］

ア 友達の意見を肯定的に聞き、自分の提案の根拠とできるよう分析して発言している。

イ 友達の意見と自分の意見との共通点を見出し、三人の考えをまとめて発言している。

ウ 友達の意見に、自分の取材結果が埋もれぬよう、自分の個性を大切に発言している。

エ 友達の意見に、自分の取材結果を結び付け、話し合いを進展させる発言をしている。

(2) （問いを放送します。）

［選択肢］

ア 森川町の小松菜の特徴について結論を急ぎすぎたので、冷静に考えるよう促そうとした。

イ 森川町の小松菜の情報が多すぎるので、さらに吟味して話し合うよう提案しようとした。

ウ 森川町の小松菜の魅力から話題がそれてきたので、話し合いの方向を修正しようとした。

エ 森川町の小松菜の長所が他の野菜と変わらないので、短所についても検討しようとした。

(3) （問いを放送します。）

［選択肢］

ア 地元の野菜ならではの新鮮さ

イ 小松菜に関わる人たちの願い

ウ 町おこしを引き起こすパワー

エ 皆を健康にする栄養価の高さ

(4) （問いを放送します。）

［選択肢］

ア 森川町の小松菜は一年中売られていますが、味は同じですか。

イ 森川町にある畑は、なぜ小松菜の栽培に適しているのですか。

ウ 手間がかかるのに、なぜ無農薬で小松菜を栽培するのですか。

エ 給食用の小松菜は、週にどれほどの量を納めているのですか。

聞き取り検査終了後、3ページ以降も解答しなさい。

二　次の(1)～(4)の――の漢字の読みを、**ひらがな**で書きなさい。

(1)　帰途に就く。

(2)　歴史を過去に遡る。

(3)　用意万端整った。

(4)　粉骨砕身して事に当たる。

三　次の(1)～(5)の――のカタカナの部分を**漢字**に直して、楷書で書きなさい。

(1)　お皿を割ってしまったことを素直にアヤマる。

(2)　アツみのある天然の氷を切り出す。

(3)　模型飛行機をソウジュウする。

(4)　テッキン五階建てのビル。

(5)　オヤコウコウな兄妹。

四

次の文章を読み、あとの(1)～(6)の問いに答えなさい。

〔後に高名な絵師、狩野永徳となる源四郎は、この時、まだ十歳。祖父元信と師匠である父、松栄のもと、絵の修行をしていた。将軍から、扇に日輪、すなわち太陽を描くよう直々に命じられた源四郎は、その数日後、近いうちに日蝕(日食)が起こることを知る。〕

源四郎はそれからずっと、日が上っている時間には縁側に座り続けた。

最初は、職人たちや使用人たちも呆れ顔を隠さなかった。松栄も苦々しい顔を浮かべてしっかりしろ云々と小言を向けてきた。日が高いうちには厠(注1)にも行かず何も飲み食いしない生活が数日続くうち、A誰も源四郎に話しかけなくなってきた。

源四郎自身、体の変調に気付きつつある。指の関節が悲鳴を上げる。周りの声も聞こえづらくなっている。夕飯はしっかり食べているから心配なかろうと高(注2)を括っていたものの、実際には相当体力を消耗しているらしい。

源四郎を照らす日輪は、欠ける様子もなく天の頂点に座っている。

と――。

源四郎の脇で、ことんと音がした。

ふと見ると、そこには水がなみなみと入った茶碗と、玄米が盛られたお椀が載った盆が置かれていた。その横には、いつの間にか元信が座っていた。

「じ、じい様」

声がかすれる。

「飲めい。無茶をする奴よ」

言葉に甘えて水を喉に流し込む。最初、うまく水が喉に通っていかないことに戸惑いを憶えた。しばし遅れてようやく喉に水が流れていく。焼けた砂に水がしみ込んでいく様に似ていた。

ふう。元信はこれ見よがしに息を吐いた。

「もう、十日、ぞ。お前がこうして日を眺め続けてから」

「そんなに経ちまするか」

「日蝕を待っておるのか。お前らしいの」

B――いや、違う。源四郎は心の中で反駁(注3)する。わしが待っているのは、日輪が本来の姿を現すその一瞬だ、と。

源四郎は元信に聞く。

「今日は、何日にございまするか」

「今日は十八日だぞ」

「ありがとう、ございまする」

源四郎は空を見上げた。しんと澄み切った空の上に輝く太陽はまるで欠ける予兆がない。本当に、日が欠けるなんてことなどありえるのだろうか。そんな気にさえさせる。

「源四郎」

「はい」

不意に呼びかけられて、源四郎は元信の顔を見据えた。元信はといえば、庇の向こうに広がる青い空模様を見上げて固まっていた。

「なぜお前は粉本(注4)を見ない？　あの粉本は、わしが作ったものぞ。粉本を見ないということはつまり、どういうことか分かっておるのか」

恐る恐る頷いた。粉本を作った元信への反抗と取られても仕方がないことはわきまえている。

源四郎は頭を振った。

「分かっております。されど――」

「されど、なんだ」

「絵を描いている気分にならぬのです。少なくとも、わしがわしの手で絵を描いている気分にはなりませぬ」

「――では、お前にとり、絵を描いているとはどういうことを言う？」

切り返されてしまうと、源四郎にもうまく応じることが出来ない。自分では、絵を描いている瞬間のことをありありと思い浮かべることが出来る。言葉では形にならない。でも――。

源四郎は、あえて自分の心のままを口にした。

「今がまさに、絵を描いている瞬間です」

「ほう？　C手を動かしておらず、待っているときが、か」

「はい」

誰にも分からない。源四郎はそう決めてかかっている。絵を描くときに湧き上がってくる衝動、予感、確信、これらの想いをひっくるめたものが、絵を描くということだった。

しかし、元信は、Dはっ、と破顔して見せた。

「よかろう。そういうことならば、やりたいようにやってみるがよいぞ。――お前の見た天地を描いてみせい」

話は終わりのようだった。すくりと立ち上がった元信は、とにかく飯くらいは食べるようにの、と言い残してこの場を去ってしまった。元信のいなくなってしまったこの場は、E空気の抜けた紙風船のようであった。

気の抜けかけた空間に、源四郎は自分の気を満たす。そうして元の静寂を取り戻した源四郎は、元信の持ってきてくれた茶碗の水をすすりながら、Fひたすらに待っていた。日輪が、日輪の本性を出すであろうその一瞬を。

（谷津矢車『洛中洛外画狂伝　狩野永徳』による。）

（注1）厠＝便所。

（注2）高を括る＝せいぜいそんな程度だろうと決めてかかる。みくびる。甘く見る。

（注3）反駁＝他人の意見や攻撃に対して論じ返すこと。反論。

（注4）粉本＝絵の手本。ここでは、狩野家において祖父元信や父松栄らによって代々作り上げられてきたものを指す。

(1) 文章中に A 誰も源四郎に話しかけなくなってきた とあるが、このときの周囲の人々の心情を説明したものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 一人になりたがっている源四郎の気持ちを気づかっている。
イ 正気とは思えない行動を続ける源四郎の扱いに困っている。
ウ 源四郎と話すことで松栄の怒りにふれることを恐れている。
エ 自分自身の信念に基づき行動している源四郎を敬っている。

(2) 文章中に B いや、違う とあるが、このときの源四郎の心情を説明したものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 元信の言葉は自分の行動の真意を理解したものではないと感じ、心の内で抵抗している。
イ 元信は自分の芸術観の理解者だと信じていたが、そうではなかったと知り幻滅している。
ウ 元信が日蝕など起こるはずがないと心の中で思っていたことに気が付き、反発している。
エ 体調を崩してまでも座り続けた自分の真剣さに気付かぬ元信に対して、いらだっている。

(3) 文章中に C 手を動かしておらず、待っている とあるが、このことがなぜ源四郎にとって絵を描いていることになるのか。その理由を説明した**一文**を文章中から**抜き出し**、**はじめの五字**を書きなさい。

(4) 文章中に D はっ、と破顔して見せた とあるが、元信はなぜ顔をほころばせたのか。元信の心情を説明したものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 絵の本質について理路整然と語る源四郎の姿に、跡継ぎらしい意気を感じたから。
イ 絵に対する己の思いを何とか言い表そうとする源四郎を、いじらしく感じたから。
ウ 源四郎とのやりとりから、源四郎の絵に対する信念を感じ、頼もしく思ったから。
エ 本物の絵師に近づきつつある源四郎の描いた絵を、粉本に加えたいと思ったから。

(5) 文章中に E 空気の抜けた紙風船のようであった とあるが、この表現について説明したものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 尊敬する元信と気持ちが通じ合い、源四郎の心中に穏やかな思いが生まれている様子を表している。
イ 絵の手法を巡る問答において元信を言い負かし、源四郎がむなしさを感じている様子を表している。
ウ 気難しい元信とのやりとりをやっと乗り切り、源四郎に精神的な疲れが出ている様子を表している。
エ 精一杯気を張っていた元信とのやりとりが終わり、源四郎の肩の力が抜けている様子を表している。

(6) 文章中の F ひたすらに待っていた。日輪が、日輪の本性を出すであろうその一瞬を。 には倒置法が用いられている。この表現から読み取れることを述べた次の文の [I] 、 [II] に入る言葉を書きなさい。ただし、 [I] は文章中から**抜き出して十四字**で書き、 [II] は「自分」、「粉本」という言葉を使って**十五字以内**で書くこと。

> 源四郎が、待ち続けていた [I] に立ち会うことで、 [II] を捉えようとする強い思いを抱いていることを、読者に印象づけている。

五

次の文章を読み、あとの(1)～(7)の問いに答えなさい。

A昔、何かで、ほんとうに人をつくるのは十六歳までの読書だという意味のことばを読んだ憶えがあります。なぜ十六なのか、その根拠はわかりません。けれども、ひとついえることは、この十五、六歳という①〜が、経験的にいっても、本の読みかたに大きな質的変化が起きる時期だということです。子どもの本の読みかたは、おとな②〜のそれとは違います。わかりやすいので物語(フィクション)を例にとって考えてみると、子どもの場合は、主人公と完全に一体化して読む③〜のがふつうです。また、物語世界への没入の度合いが徹底しています。子どもは、主人公になりきって、すっぽり物語の中にはいりこむことができるのです。夢中になっているときは、それこそどこにいるかも、自分が何者かも忘れてしまいます。

あるとき、図書館の仲間たちと話していて、子どものとき、親からよく、「本を読んでいると、呼んでも返事をしない」と、叱られたということが話題になりました。本が好きな者たちの集まりですから、だれしも憶えがあり、「そう、そう」「わたしも」(注1)ということになったのですが、そのとき、ひとりの人が、いみじくも「だって［　B　］んだもの！」といったので、大笑いになりました。そうなんです。本の中の世界にはいっているときは、「［　B　］」のです。それほどの集中が可能な④〜は、子どものときをおいてほかにありません。

また、幼い子どもたちの遊びを見ているとわかることですが、子どもたちは、「みたて」や「つもり」の天才です。瓦のかけらをカツレツに見たててままごとをし、かいじゅうになったつもりであばれまわります。

イギリスの児童図書館員の大先達で、すぐれたお話の語り手であったアイリーン・コルウェルさんから聞いたのですが、彼女が、幼い子どもたちの集まりにお話をしに行ったときのこと。はじめに、子どもたちと親しくなるきっかけにと持っていったおさるの指人形を出して、このおさるさんはおなかがすいているのだ、といったのだそうです。すると、聞き手の子どものなかのひとりが、すぐCバナナをさしだしてくれました(注2)(うそこのバナナです)。指人形のおさるは、皮をむき、バナナを食べました。

それから、さて、コルウェルさんが、お話をしようと椅子に腰をおろそうとしたとたん、子どもたちから、いっせいに「ああっ！　だめ！」と、声が上がりました。その椅子は、さっきおさるがむいたバナナの皮をおいたところだったのです！　子どもたちには、椅子の上におかれた、うそこのバナナの皮がちゃんと見えていたのです。

この「何かを何かに見立てる力」「何かになったつもりになれる力」「見えないものを見る力」は、子ども特有の能力です。本を読むときにも、この能力はいかんなく発揮されます。主人公との完全な一体化が可能なのは、子どものこの特性によります。すぐれた物語に出会えば、子どもは、文字通り「物語を生きる」ことができるのです。Dそして、生きられた物語は、当然のことながら、子どもの中に深い刻印を残し、いわば子どもの精神世界の骨格となり血肉となって、のちのちまで長続きする影響を与えます。

どんなにすばらしい作品であったとしても、おとなの読者が、これほ

どの集中と、作中人物との一体感をもって本を読むことは、非常に稀、いや、まず不可能といっていいでしょう。読んでいるあいだ、たえず「読んでいる自分」の意識があり、夢中になりつつも、どこかに批判的な見方が働いていますから。十六歳までの読書だけが、ほんとうにその人のものになるのだという説は、こういうことではないだろうかと、わたしは考えています。

（松岡享子『子どもと本』による。）

（注1）　いみじくも＝まことにうまく。非常に巧みに。

（注2）　うそこ＝子どもの間でよく用いられる「うそ」の言い換え。

(1)　文章中の〰〰①～④の四つの「の」のうち、一つだけ**働きの異なるもの**がある。その符号を書きなさい。

(2)　文章中の A 昔 は、どの言葉にかかるか。文章中から**抜き出して**、**一文節**で書きなさい。

(3)　文章中の B □ に入る言葉として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　そこにいない　　**イ**　返事をしたくない

ウ　声が出ない　　**エ**　名前を忘れてしまう

(4)　文章中に C バナナをさしだしてくれました とあるが、この行為はどのようなことの現れか。それを説明した次の文の □ に入る言葉を、文章中から**十四字**で**抜き出して**書きなさい。

子どもたちは □ であるということの現れ。

(5)　文章中の D 生きられた物語 を説明したものとして最も適当なものを、次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　多くの子どもに世代を超えて読み継がれてきている、古典としての物語。

イ　子どもの想像力をかきたて、かけがえのない経験をさせる力をもつ物語。

ウ　作中人物への共感や反発をおぼえながら、自己の成長を感じ取れる物語。

エ　世界中の子どもが話の中で主人公になりきることができた、有名な物語。

(6) 文章中における筆者の主張についてまとめた次の文章を完成させなさい。ただし、［　Ⅰ　］はあとのア～エのうちから最も適当なものを一つ選び、その符号を書き、［　Ⅱ　］は文章中の言葉を使って十五字以上二十五字以内で書くこと。

> 大人にとっての読書は、常に読んでいる自分を［　Ⅰ　］に見ているという特徴がある。一方、子どもにとっての読書は、主人公と完全に一体化しつつ、物語世界に没入することにより得た経験が、子どもの［　Ⅱ　］という意味において、特別なものである。

ア　主体的　　イ　主観的　　ウ　受動的　　エ　客観的

(7) この文章についての説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　大人と子どもの本の読み方の違いを指摘し、大人の読書のあり方について、読者に反省を促そうとしている。

イ　読書についてある考えを提示し、それについて自らの経験や聞いたことをふまえて、その考えを深めている。

ウ　読書の質的変化について問題を提起し、事例に基づき問題を解決しつつ、分かりやすい文章にまとめている。

エ　子どもの遊びの話題から読者に幼少期の読書を回想させ、子どもの読書こそが真の読書であると訴えている。

六

次の文章を読み、あとの(1)～(4)の問いに答えなさい。

一休和尚（注1）は、いとけなき時より、常の人にはかはりたまひて、利根（幼い）。A かはりたまひて を現代仮名づかいに改め、ひらがなで書きなさい。

発明なりけるとかや。師の坊をば養叟和尚（注2）と申しける。B こびたる旦那（師匠の僧）あり。常に来りて、和尚に参学などし侍りては、一休の発明なるを心地よく思ひて、折々はたはぶれをいひて、問答などしけり。

（でありたそうだよ）

（いつも来て、和尚に仏教を学んだりしましては）

（とぎどき冗談を言って）

ある時かの檀那（注3）、かはばかま（注4）を着て来りけるを、一休門外にてちらと見、内へはしり入りて、へぎに書付（薄い木の板）立てられけるは、

この寺の内へかはのたぐひ、かたくきんぜいなり。C もしかはの物入る時は、その身にかならずばちあたるべし

と書きて置かれける。

かの旦那これを見て、「皮のたぐひにばちあたるならば、このお寺の太鼓は何とし給ふぞ」と申しける。一休聞き給ひ、「されば（だからですよ）とよ、夜昼三度づつばちあたる間、その方へも太鼓のばちをあて申さん、皮のはかまきられけるほどに」とおどけられけり。

（『一休ばなし』による。）

（注1）一休和尚＝一休宗純（そうじゅん）。室町時代の僧。
（注2）養叟和尚＝養叟宗頤（そういい）。室町時代の僧。
（注3）檀那＝文章中の「旦那」に同じ。寺院に金品を寄付する信者。
（注4）かはばかま＝けものの皮で作った袴（はかま）。袴は和装で着物の上から下半身に付ける衣類。

(1) 文章中の A かはりたまひて を現代仮名づかいに改め、ひらがなで書きなさい。

(2) 文章中に B こびたる旦那 とあるが、この人物は一休をどのように思っているか。最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 幼い一休が修行する姿をけなげだと思っている。
イ 将来有望な一休をとても頼もしいと思っている。
ウ 一休に才知があることを好ましいと思っている。
エ 一休の創意工夫に自分も学びたいと思っている。

(3) 文章中の C きんぜい を漢字に直すとき、最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 均整　イ 謹製　ウ 近世　エ 禁制

(4) 次の文章は、中学生の二宮さんが授業でこの場面を読んで、友達の三田さんと意見交換を行ったものです。文章中の［　Ⅰ　］～［　Ⅲ　］に入る言葉を書きなさい。ただし、［　Ⅰ　］、［　Ⅱ　］は文章中からそれぞれ**抜き出して**、［　Ⅰ　］は**八字**、［　Ⅱ　］は**二字**で書き、［　Ⅲ　］は自分の言葉で**八字以内**で書くこと。

二宮さん　私は、旦那がわざと「かはばかま」を着て来たのではないかと考えました。普段から寺に来ている時の、一休に対する態度を表す「［　Ⅰ　］」という記述に注目したからです。そのような人物なら、一休がどうするか、試してやろうと考えたのかもしれません。

三田さん　一休もまた、「［　Ⅱ　］」という言葉をわざと平仮名で書いたのかもしれませんね。初めから二つの意味を込めた言葉遊びで旦那をやり込めるつもりだったのでしょう。

二宮さん　二人は互いに相手の出方を試したんだと思います。一休が旦那を「ちらと見」ただけで書付の文言を書き上げた行動からは、一休が見事に［　Ⅲ　］ということが読み取れて、おもしろいですね。

七　「転石苔を生ぜず」ということわざは、本来、次のAのような意味で使われていたものが、Bのような意味でも使われるようになってきています。

A　一か所に落ち着かない者は成功しない。

B　絶えず活動している者は新鮮である。

このことについて、次の〈条件〉にしたがい、〈注意事項〉を守って、あなたの考えを書きなさい。

〈条件〉

① **一段落構成**とし、**七行以内**で書くこと。

② はじめに、AとBのうちどちらかを選び、「苔が生える」ことについて、どのようなことを意味しているかがわかるように説明し、次に、はじめに選んだAかBに関わる自分自身の体験（見たり聞いたりしたことも含む。）を書くこと。

なお、どちらを選んでも、そのこと自体が採点に影響することはありません。

〈注意事項〉

① AとBのうちから**一つ**選び、その符号を**○で囲む**こと。

② 氏名や題名は書かないこと。

③ 原稿用紙の適切な使い方にしたがって書くこと。

ただし、／／や／／／などの記号を用いた訂正はしないこと。

平成三十一年度　後期選抜　学力検査

国語　正解表

問題番号	正解	配点及び注意	計
一 (1)	エ		
(2)	ウ		
(3)	イ		
(4)	ウ		
		各3	12
二 (1)	つ		
(2)	さかのぼ		
(3)	ばんたん		
(4)	ふんこつさいしん		
		各2	8
三 (1)	謝		
(2)	厚		
(3)	操縦		
(4)	鉄筋		
(5)	親孝行		
		各2	10
四 (1)	イ		
(2)	ア		
(3)	絵を描くと、	4	
(4)	ウ	各3	
(5)	エ		
(6) I	日輪が本来の姿を現すその一瞬	4	
(6) II	粉本によらない自分なりの日輪	4 同趣旨ならば正解とする。部分点を与えてもよい。	24
五 (1)	②		
(2)	読んだ	各2 (1)は数字だけで○がなくても点を与える。	
(3)	ア		
(4)	「みたて」や「つもり」の天才	各3	
(5)	イ		
(6) I	エ	4	
(6) II	精神世界の骨格や血肉となり、長く影響を与える	4 同趣旨ならば正解とする。部分点を与えてもよい。	24
(7)	イ	3	
六 (1)	かわりたまいて		
(2)	ウ		
(3)	エ	各2	
(4) I	たはぶれをいひて	各2	
(4) II	ばち		
(4) III	機転(気転)をきかせた	2 同趣旨ならば正解とする。	12
七	(解答例) Aの場合 「苔が生える」とは、同じ場所で年月を重ねることで、成果や信用などが得られることを意味していると思う。私は小学校の頃から図書委員を続けてきた。毎日図書室にいることで顔を覚えてもらうようになり、感想を述べ合う仲間もできた。読書の楽しみが広がったのは、長く委員を続けたおかげだと思う。 Bの場合 「苔が生える」とは、同じやり方を続けることで、考え方や感性が凝り固まったり、古くなったりしてしまうことを意味していると思う。和食を極めた料理人が、活躍の場を海外に求め、日本料理の手法をその国の伝統的な料理に取り入れ、新境地を開こうとする姿を本で読んだことがあり、感動した。 以下の観点を参考に、採点基準の細部については各学校で定める。 ○内容 ○字数制限・段落構成 ○表現・表記 ※全ての条件を満たしていない場合でも、部分点を与えてもよい。	10	12
合計			100